

宮沢賢治と現代文学 その3

「銀河鉄道の夜」と「世界の中心で、愛をさげぶ」における死生観

—ジヨバンニとカムパネルラの変奏—

秋枝（青木）美保

要旨 童話「銀河鉄道の夜」は、一九八〇年代以降、アニメーション化されて若者によく知られるようになり、現代少年少女の教養の一部となっている。二〇〇一年刊行の人气小説「世界の中心で、愛をさげぶ」は、恋愛小説の形をとりながら、実はその若者の教養の上に、互いに愛し合った十代後半の主人公二人が死別に直面し、自らの苦悩を通して死生観を構築していく過程を描いた一種の教養小説である。本論においては、現代社会において構築の困難な死生観を、若者が身近に存在する文学を通して立ち上げる過程を、作品内の表現を分析することを通して論じた。それによって、この小説の教養主義的な性格を明らかにした。

キーワード (童話「銀河鉄道の夜」) (死生観) (先住民文化)

はじめに

「宮沢賢治と現代文学」と題して、これまで柳美里、長野まゆみの作品における賢治の作品の影響について論じてきた。これらの作品は、一九八〇年代の終わりから九〇年代の初めにかけて発表されたもので、そこに主人公の女性の心理―「病む女性」―について特徴があることを指摘した。

これに対して、小説「世界の中心で愛を叫ぶ」は二〇〇一年四

月に発表されたもので、周知のようにハイティーンの少年・少女の悲恋を描いたベストセラー小説である。映画版「世界の中心で、愛をさげぶ」は二〇〇四年五月にロードショーが始まるが、それは映画「冬のソナタ」(韓国での放送 二〇〇二年四月、NHK BSでの放送 二〇〇三年末再放送、NHK総合での再々放送二〇〇四年四月〜八月)の人気と時期を接している。そのことは「世界の中心で、愛をさげぶ」が、「冬のソナタ」同様純愛物語のテイ

ーン版といった受け取り方をされたことを示している。しかし、この小説には、そのような一般の受容の仕方とは異なり、作者の仕掛けたいろいろな工夫があり、人気物語の形をとりながら、十代の少年少女への、生についての貴重なメッセージが込められている。そして、その仕掛けの重要な部分に宮沢賢治の作品があると言える。

1、文学への招待

この小説の中の時代は、発表された時代とほぼ重なると考えてよからう。図書館ではコンピュータで蔵書を検索することになっているし、飛行機の搭乗券もコンピュータで手に入れることになっている。コンピュータネットワークが普及した一九九〇年代の社会が小説の背景となっていると言つてよい。また、主人公たちは、高校の修学旅行でオーストラリアに行くことになっているが、「修学旅行博物館」(財団法人「全国修学旅行研究協会」の公式サイト「修学旅行情報センター」による)における「修学旅行の歴史」によれば、一九八〇年代の後半から公立高校の海外修学旅行が急増し、その行き先として韓国・中国・米国・オーストラリアが一般化していったという。

小説の主人公たちは、おそらく一九九〇年代の後半に十四五歳を迎える子供たちで、バブル期に生まれた少年少女たちと考えられる。この世代の子供たちは、生まれたときから一日のかなり長い時間を、ビデオとテレビに接しながら育っている。彼らが成長する間はバブル経済の真ただ中で、物事の効率化が進み、文化

も商業化の波に吞まれていった。大塚英志「おたく」の精神史一九八〇年代論(注1)にその実態の一端は詳しい。一方、「教養主義の没落」(注2)が叫ばれ、人々の精神世界の様相の大きな変化が指摘され始める。形のあるもの、目に見えるものが中心となっている現実と、一方では、コンピュータネットワークの普及により、複雑な仮想現実世界が肥大化していくというアンバランスな状況の中で、精神文化はその本質を見極めることが困難になっていく。そういった中で、神秘の世界、見えない世界の手触りを、どのように自らの精神世界の中に位置づけていくかということとは、表面下で大きな問題となっていく。小説「世界の中心で、愛をさけぶ」のテーマは、少年少女たちの精神世界が確立される過程で、どのように「見えない世界」を受け入れ、自らの中に位置づけていくかということにある。主人公朔太郎の「あの世も天国も」「みんな嘘だと思っつよ」という言葉に、祖父は「見えるもの、形のあるものがすべてだと考えると、わたしの人生はじつに味気ないものになるんじゃないかね」と述べている。

合理的な考え方と効率化の進む現代において、教養主義的な方法における読書による思考の習慣も一般的ではなくなり、オウム真理教による地下鉄サリン事件(一九九五年三月二十日)後の社会においては、宗教へのアプローチも困難な状況に陥っている。そのような中で、少年少女が自らの世界観の中で「見えない世界」を獲得することはどのような方法で可能であろうか。この小説は、現代の少年少女が、身の回りにある教養のかけらを拾い集めながら、困難な、自らの精神世界の構築に立ち向かわされる物語と言

える。

その様な時代にあつて、この小説の主人公たちは、「文学かぶれ」の親たちからその名前に文学の刻印を捺されてこの世に出された者たちである。主人公「松本朔太郎」、その友人「大木龍之介」の名前の由来が小説の冒頭近くの二人の会話の中で語られ、「朔太郎」は「萩原朔太郎」からであり、「龍之介」が「芥川龍之介」からとつた名前であることが明かされる。つまり、「親が文学かぶれだったんだね、お互いに」と、お互いの名前が「文学かぶれ」の親たちの趣味によつてつけられたことを確認することになつていゝる。二人の友人関係のある部分はそういう共通の家庭環境と趣味の世界に裏づけされていることが、多少わざとらしいやりかたではあるが、示されている。中でも主人公「朔太郎」の場合には、「うちの場合はおじいちゃんだけだね」とあり、その後の小説における「朔太郎」と祖父との「隔世遺伝」と言われる強いつながりが示されることになつていゝる。逆に言えば、このような設定がなければ、この小説のテーマは展開しにくいものであつたと言へるのではなからうか。

その上で、作者は「朔太郎」の家の設定にさらに、もう一つの仕掛けをしている。

ぼくの家は市立図書館の敷地内にある。本館に隣接した二階建ての白い洋館は、ほとんど鹿鳴館か大正デモクラシーかという代物だ。真面目な話、この建物は市の文化財に指定されていゝて、居住者は勝手に改修工事などしてはならないことになつていゝる。文化財と言へば有り難そうだが、住んでいゝる

方としては、有り難くもなんともない。現に祖父などは、年寄りには住みにくい家だとか言つて、一人でさつさと中古マンションに移つてしまつた。(中略)

どういゝる事情で、一家がこの家に住むよつたのか知らない。父の酔狂を別にすれば、きっと母が図書館に勤めていゝることと関係があるのだから。(中略)家と図書館のあいだは、最短で三メートルほどしかない。そのため二階にあるぼくの部屋からは、窓際の机に坐つていゝる人の本が一緒に読める、といゝるのは嘘だけだ。

朔太郎の家は、「鹿鳴館か大正デモクラシー」の時代の遺物であり、また「市立図書館の敷地内にある」といゝ設定で、主人公が教養主義の精神文化とのつながりの中にあり、また読書といゝる教養主義の方法に極めて近い位置にあることを示していゝる。彼は、過去の書物の成果に取り巻かれて暮らしていゝるのである。

その上でさらに次のよつた設定で、主人公のイメージおよび役割が当てられていゝる。

こつ見えでもぼくは孝行息子なので、中学に入つたころから、ときどき部活の暇なときに母の手伝いをするこつがあつた。たとへば土曜日の午後や、日祭日など、利用者の多い日は、貸出カウンターで本のバーコードをコンピューターに入力したり、返却された本をワゴンに積んでもとの本棚に戻しにいゝつたり、『銀河鉄道の夜』のジヨバンニなみの勤勉さなのである。もちろん母子家庭ではないし、ボランテイアをやつていゝるわけでもないから、日当はもらつた。もらつたお金は、ほと

んどがCD代になった。

ここはストーリーとは特に関係のない一節であるが、これによって「朔太郎」は「ジョバンニ」としてイメージ付けられることになる。そして、それは、この物語の底を流れる、悲恋の物語の奥に隠された深層部のテーマを暗示する。「ジョバンニ」は友達「カムパネラ」の死に立ち会い、生と死の境に踏み入る人物であり、それは、「朔太郎」が初恋の「亜紀」と死別するという、この物語のその後の展開を予告する伏線ともなっている。それはまた、妹トシとの死別にもつわって、生と死について多くの作品を書くことを通して、死生観を追究し続けた宮沢賢治自身のテーマとも重なっていく。後述するように、作者は、明らかにそれを意図してこの物語を構築していったと考えられる。

『銀河鉄道の夜』は未完の作品でもあり、童話としては子供たちには難しい物語であるかもしれない。しかし、ますむらひろしによつて一九八五年にアニメーション化されてからは、少年少女たちにもよく知られるようになった。一九八〇年代以降、「銀河鉄道999」をはじめ、漫画において、「銀河鉄道の夜」の再話やパロディが登場した。たとえば、パロディとしては、白井恵理子著『賢治と水晶機関車』(角川書店 一九九七年六月)があり、再話としては、片山秋峯著『銀河鉄道の夜』(角川書店 一九九六年七月)、松田一輝画・監修小田切進・解説原士朗『銀河鉄道の夜』(ぎょうせい 一九九二年二月)がある。朔太郎の口から何気なく出てきた「ジョバンニ」と自分との重ね合わせは、現代の少年少女の、そのような文化状況を背景としていよう。

2、「亜紀」の死―「病む女性」の残したもの
小説のヒロイン「広瀬亜紀」の名前の由来は、本人の説明によれば、地質時代の「白亜紀」からとられているという。朔太郎は、その名前の由来が季節の「秋」から来ていると思っていたが、それが誤解であることが本人からの説明で明かされる。

「わたしのアキは白亜紀の亜紀よ」彼女は説明した。「白亜紀」つてのはね、地質時代のなかでも、新しい動物や植物が栄えた時期なんですって。恐竜とかシダ植物とか、わたしもこれらの生物たちみたいに栄えますようにって、そういう願いを込めてつけられた名前なのよ」

悲劇のヒロイン、美人薄命の女性の名前の由来としてはいささかそぐわない。「銀河鉄道の夜」のイメージに導かれて賢治の作品との関連に気づき、その関連でこの「白亜紀」の説明を見ると、宮沢賢治の文学を知るものならば、誰でもすぐに詩「小岩井農場」の一節を思い浮かべるだろう。賢治の作品には、しばしば白亜紀のイメージが登場する。

いま日を横ぎる黒雲は

侏羅や白亜のまつくらな森林のなか

爬虫がけはしく歯を「鳴」らして飛ぶ

その「氾」濫の水けむりからのぼつたのだ
たれも見てゐないその地質時代の林の底を
水は濁つてどんだんながれた
いまこそおれはさびしくない

賢治の作品の中では、「白亜紀」は生命の自由奔放な繁栄の時代とされていると言つて良い。

小説の中における「アキ」も、朔太郎の憧れや恋や崇拜などの思いを発生させる源として、重要な核を形作る。そのイメージは、「ジュリエット」、「かぐや姫」といった古典のヒロインに重ねられている。そして、特に、朔太郎が「ジヨバンニ」と重ねられるのに対して、アキは朔太郎によつて「顔は風の谷のナウシカを少し虚弱にしたような感じ」とされ、アニメ「風の谷のナウシカ」のヒロイン「ナウシカ」と重ねられている。「ナウシカ」は、最終戦争の後に汚染された「腐海」とその瘴気のただ中であつて、その汚染から免れた「風の谷」で育つた王女であり、その穢れた世界を救う救世主である。いわばジャンヌ・ダルクのような人物である。

小説においては、このような作品内の核をなす少女が「白血病」となり、徐々に死に近づいていく過程が描かれる。その死への時間がストーリーの流れを牽引していく。まさしく「生命」の核が失われていく過程を、残されたものがどのように受け止めていくのか、この小説の主たるテーマと言えよう。これは、前述のように、宮沢賢治が妹トシを失い、その後の執筆活動の中で、死生観を追求し「銀河鉄道の夜」を書き上げたのと重なるものであり、それは作者自身の意図でもあると考えられる。

また、それは、前述の拙論ですでに述べたように、「病む女性」という時代のイメージとも象徴的なレベルでは重なるモチーフと言つてよからう。「病む女性」のイメージは、前掲の大塚英志の一

九八〇年代論にも指摘されているところであるが、斎藤環『戦闘美少女の精神分析』(注3)において指摘される同時代の文化に広く登場するヒロインと、おそらく表裏をなすイメージと考えられる。斎藤によれば、「戦闘美少女」とは、「リボンの騎士」「じゃりん子チエ」「風の谷のナウシカ」「セーラームーン」などに登場する「戦う少女」であるときれている。斎藤は、そのイメージが「きわめて広範囲に、メディアの至るところに、その表現が浸透している」として、その文化的状況を分析的に記述しようとしているが、その資料として挙げられている作品年表によれば、斎藤の認定する「戦闘美少女」ものは一九六〇年代を始まりとして、一九九〇年代にそのピークを見せる。その分析の中で、一九八四年に劇場公開された「風の谷のナウシカ」は、「大文字で特筆すべき」、「戦闘美少女ものとしても最重要とみなされる」として注目されている作品である。その位置づけは、「もののけ姫」のヒロイン「サン」と結び付けられて、「ともに異なつた二つの世界を媒介するような位置を占める」とされている。「ナウシカは人間界と腐海を仲介し、サンは文明と森林の対立を象徴する」とし、その働きを「巫女」のものとしている。

「世界の中心で、愛をさけぶ」における「アキ」は、かぐや姫とも重ねられており、かぐや姫が昇天することによつて、地上の世界に対して月の世界の存在を明かした者であることとつながっているように思われる。それは、アキが死ぬことによつて、朔太郎に対して、現実に対する「見えない世界」の存在を明かしたてるのとちょうど重なるからである。そして繰り返し述べてい

るように、朔太郎の意識の中で死が位置づけられていく過程そのものに、おそらくこの小説のテーマはあると考えられる。それは、またアキが、これらのヒロインを主人公とする物語の系譜につながる存在であることを示している。ただ、病気になる前のアキについての描写はそれほど印象的ではなく、小説の前半に学校での活動の様子が多少出てくるだけである。しかも「そこそこに可愛くて性格が良く、勉強もできる彼女のファンは、クラスの男子のなかにもたくさんいた」という程度のことしか語られていないのではあるが。とはいえ、アキと朔太郎は初めて出会った中学二年生のとき、一緒にクラス委員をしていたのであり、この二人が同年代の仲間の中でもリーダー的な理想のカップルとして設定されていることは注目しておいて良いのではなからうか。ただし、「ナウシカを虚弱にしたような」と朔太郎から評されているように、作中ではアキの衰弱の様子は痛ましく、「戦闘美少女」のその後を象徴するようにも思われる。

3、死後の世界とは？—現代の教養主義的方法—

この小説は五章仕立てになっているが、健康な二人の逢瀬は第二章のみで、第三章ではアキが病気になる、第四章はアキの葬儀から始まることになっている。それは、一般的に受け取られているように、二人の関係を辿る純愛物語とは異なるところに小説の語りの目的があることを示している。純愛物語ならば、「死」を二人の愛の完結として、「死」を終点として語られるだろうからである。たとえば堀辰雄の「風立ちぬ」のように、「世界の中心で、愛をさ

げぶ」は朔太郎の一人称で語られており、朔太郎にとつての太陽である「アキ」が死によって彼から隠されてしまう過程の中で、二人が死をどう受け止めていくか、そして生き残る朔太郎が自らの中でどのように死生観を形成していくかが中心的に描かれている。その過程で、彼らの思考を導いていくのは、彼らの身近にある文学作品である。そのストーリーの中では、現代の若者が普通の生活を送る中で、誰もが出会おうであろう極めてオーソドックスな文学作品との出会いがこれらの方向性を決めていくようにちりばめられている。そこに、古今東西の、死によって隔てられる恋人たちの物語が登場する。

まだお互いの気持ちを意識する前の中学二年生の文化祭では、二人は、クラスの出し物である「ロミオとジュリエット」で、ロミオとジュリエットを演じたのだった。これは朔太郎にはあまり意識されていないように思われるが、中学三年の夏休みからアキは彼の図書館に「毎日のように」勉強をしにくるようになり、二学期が始まってまもないころ、アキが交換日記を持ってきて、気乗りのしない朔太郎に迫ることになる。アキの気持ちの方が先に動いたことが推察される。その二人の関係の基盤に「ロミオとジュリエット」は確実に大きな働きをしていると言える。

中学三年生のクリスマスにはアキのクラス担任が突如亡くなり、その葬式で弔辞を読んだアキに対して、朔太郎は初めて自らの気持ちを確認に認識するのだが、高校生になってふたたび同じクラスになったとき、朔太郎の気持ちはさらに大きく進化し始める。そのきかっけとなったのは、高校の国語の授業でしよっぱなに登

場する「竹取物語」の講読であった。

四月からはじまった『竹取物語』の講読は佳境に入っていた。月の使者から姫を守るために、帝は翁の屋敷のまわりを兵でかためる。しかし姫は連れ去られてしまう。あとに残されたのは、帝への手紙と不死の薬。だが帝は、姫のいない世界でいつまでも生きていたいとは思わない。そこで彼は薬を月にもつとも近い山の頂で焼くように命ずる。富士の名の由来を語るくぐりで、物語は静かに幕を閉じる。

この物語の解説を聞きながら、朔太郎はアキを眺め、その存在が「つくづく不思議な出来事」に思えてくると同時に「その美しい人が、ぼくのことを思ってくれている」ということに感動を覚える。が、それと同時に「突然、恐ろしい確信にとらわれた。」あまりの幸福に、思わずその幸福が失われる日のことを想起したからである。「いつか彼女は月の使者によって連れ去られてしまう。あそこには不死のように長い時間だけが残される」という、彼女がいない時間の恐怖が、彼を自然に死についての思索に導く。彼にとつて、にわかに、生きている時間は限りのあるものであることが認識され始める。

授業が終わると、毎日一緒に帰宅した。学校から家までの道ができるだけゆつくり歩いた。ときには遠まわりをして時間を稼いだ。そんなふうにして帰っても、いつもあつと言う間に分かれ道まで来てしまう。不思議なことだ。

回想の中で語られる語りの中で、この感覚は「人生」においても同様であることが後に再確認されたという。

このように恋人同士の間には流れる時間の不思議について語られた後、第一章「6」においては、朔太郎とアキの死別の物語に直接の影響を与える朔太郎の祖父の恋物語が語られる。朔太郎は、中学生のとき、祖父から若いときの恋人の話聞いていた。それは、祖父の口を借りて語られる純愛物語である。それによると、祖父は戦前、戦争に行く前十七八歳のころ、好きな人があったが、ついに結婚することはできなかった。祖父は戦争に行くことになり、恋人の女性は結核を病んでおり、おそらく互いに生きて合えることはないだろうと覚悟を決めて、「別れる間際に、せめてあの世で一緒になろうと誓い合っ」て別れた。ところが、祖父は生きて祖国に帰り、恋人はストレプトマイシンの発明によって命をとりとめた。戦後、祖父は一方ならず仕事に打ち込み、恋人との結婚をめざすが、恋人の両親は祖父を娘の結婚相手として認めてくれず、結局ふたりは、それぞれ別の人と結婚することになったという。

高校生になった朔太郎は、さらにその後日談を祖父から聞き、その上祖父から頼みごとをされる。二人は結婚後もお互いのことを思い合い、お互いの連れ合いが亡くなったら一緒になるつもりであったが、彼女は連れ合いよりも先に死んでしまったので、それは果たされなかった。それで、祖父はその恋人の墓をあげて分骨をし、そのお骨を朔太郎に預けて自分の死後に自分の骨と混ぜてしかるべき場所にまいてくれるように、朔太郎に頼む。

その自分の奇異な行動を朔太郎に説明するために、祖父は漢詩「葛生」を引用して、自分の気持ちが太古の昔から続く人情であ

ることを論ず、ということになっており、ここにまた文学作品が登場する。

「朔太郎は漢詩を習っただろう」祖父は古めかしい本のペー
ジを開きながら言った。「この詩を読んでくらん」

題名には「葛生」とある。白文の下に書き下し文が付いて
いるので、そっちの方にざっと目を通した。

「どういう詩かわかるかい」

「死んだら同じ墓に入ろうってことだろう」

祖父は黙って頷き、「夏の日、冬の夜、百歳の後、その居に帰
せむ」と最後の部分を語んじた。

「夏の日、冬の日、冬の夜の長き夜を、きみはここに眠る。
百歳ののち、わたしもいずれあなたのもとに眠るであろう。
安らかにその日を待たたまえ」というぐらいの意味かな」

「好きな人が死んでしまったんだね」

詩「葛生」は、「詩経」「国風」の中の詩で、「晋の献公が戦を好み、
当時戦に出て帰らぬ者が多く、その妻が怨望する歌とする」(注4)
ものという。「愛する人はもう居ない」「百歳の後にこそ、私もあ
なたの塚に入ろう」という句が繰り返される。祖父は、「この詩は
いまから二千年も、それ以上も昔のものだ。朔太郎たちが学校で
習う、絶句や律詩といった、きちんとした形式がまだ確立される
遙か以前の、古い時代の詩だ。でもこの詩を作った人々の気持ち
は、いまわしらにも伝わってくるようじゃないか。それは学問や
教養などなくても、誰にでも伝わるものだと思うよ」と、多少わ
ざとらしい解説を加えている。

この祖父の話は、朔太郎とアキを、男女の愛について、また死
とは何かという哲学的な命題に二人を導く。結婚している男女が、
他の人をずっと思い続けるといふのは「不倫」ではないのか、ま
た一人の人を五十年も愛し続けるといふのは、どういう意味を持
つのかといったことである。アキはこれを「純愛」といい、「文化
や歴史を超えたこと」とも述べている。朔太郎はチンパンジーと
人間の違いに思い及び、「種も超える」という。つまり、アキと朔
太郎は、二人の愛の強さに人間の存在の独自性を認識していると
言えよう。

さらに、小説のテーマと思われる死と墓について、根源的な疑
問が話し合われる。祖父と恋人の「この世」で果たされなかった
思いは限りある生の間の時間を越えて、自然に「死後の生」を導
き寄せている。そこに二人の疑問は集中していく。

「あの世を信じる？」

「どうして？」

「おじいちゃんが好きで人と、あの世で一緒になろうって誓い
合ったわけだからさ」

「アキはしばらく考えて、「わたしは信じないな」と言った。

「毎日寝る前に、お祈りしてるんだらう？」

「神様は信じるの」彼女はきっぱりと答えた。

「神様とあの世と、どう違うわけ？」

「あの世って、この世の都合で作られたもののような気が
しない？」

「ぼくはそれについてちょっと考えた。」

「するとおじいちゃんたちは、あの世でも一緒になれないね」「あくまでわたしが信じる信じないの話よ」アキは弁解するよ
うに言った。「おじいさんとその人には、また別の考え方が
あつたんでしようから」

「神様だつて、この世の都合で作り出された可能性はあるよ。神
頼みなんて言葉もあるくらいだから」

「それはきつとわたしの神様とは違うんだわ」
「神様は何人もいるのかい？それとも何種類？」

「天国を畏れることはないけど、神様を畏れることつてあるでし
よう。そういう気持ちを抱かせる神様にたいして、わたしは
毎晩お祈りしているの」

「どうか天罰を下さないでくださいって？」
ぼくたちはついに廊下に出された。廊下でも、懲りずに天国や
神様の話などをしてるうちに授業が終わり、二人とも職員
室に呼ばれて、生物の教師とクラス担任から、それぞれ油を
搾られた。

長い引用になったが、祖父たちの「あの世で一緒になろう」と
いう言葉から、「あの世」というのは何かについて、根源的な会話
がなされる場面である。「あの世」のことは、自然と「神様」の存
在についての話と結びついていく。アキが言っているのは、自ら
の存在を根拠付けるものとしての、素朴な存在としての「神」で
あろう。それは、「この世」を相対化する「あの世」に所属する観
念といえる。しかし、「あの世」という確固とした空間は存在する
と思えず、それは「信じない」という。

この会話は、明らかに「銀河鉄道の夜」における、ジヨバンニ
と青年教師の一行との間に交わされる「神様問答」を下敷きにし
て、設定されていると考えられる。

もうちきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい。「青
年がみんなに云ひました。

(中略)

ジヨバンニがこらえ兼ねて云ひました。「僕たちと一緒に乗つ
て行かう。僕たちどこまでだつて行ける切符もつてるんだ。」
「だれどあたしたちもうちこで降りなけあいけないのよ。こ
こ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしきうに云ひま
した。

「天上へなんか行かなくなつていいぢやないか。ぼくたちここ
で天上よりもつといいとこをこさえなけあいけないつて僕
の先生が云つたよ。」だつておつ母さんも行つてらつしやる
しそれに神様が仰るんだわ。「そんな神様うその神様だい。」
「あなたの神さまうその神さまよ。」「さうぢやないよ。」あ
なたの神さまつてどんな神さまですか。「青年は笑ひながら
云ひました。「ぼくはほんたうはよく知りません、けれども
そんなんでなしにたつたひとりほんたうのたつた一人の
神さまです」「ほんたうの神さまはもちろんたつた一人で
す。」ああ、そんなんでなしにたつたひとりのほんたうのほ
んたうの神さまです。「だからさうぢやありませんか。わた
くしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわた
くしたちとお会ひになることを祈ります。」青年はつつまし

く両手を組みました。女の子もちやうどその通りにしました。みんなほんたうに別れが惜しさうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣き出しそうとしました。

「銀河鉄道の夜」における「神」についての問答は、どれが本当の神かということをめぐるなされておられ、神の存在については認められた上で話しになっている。それは、アキと朔太郎の問答とは基本的に議論の行われている基盤自体に違いがあるものの、明らかに、両作品には、少年少女の素朴な疑問としての「神」への疑問が共通に見られる。「世界の中心で、愛をさけぶ」は、昼間の明るさのみの現代社会において、少年少女に「あの世」について語らせるという困難な命題に取り組んだ物語といえよう。

これらの問題は、アキの死後の朔太郎の思索につながっていき、その思索が実際に朔太郎の死生観をかたちづくることによって、生きたものとなっていくといえる。それを想定しての準備として、周到に、いくつかの文学作品を引用しながら物語を押し進めているのである。その際、「ロミオとジュリエット」、「竹取物語」、「葛生」、これらの文学作品は、いずれも、学校の教育内容との関連で登場している。特に、「竹取物語」は、高校の国語教科書ではほぼすべての教科書に古典入門として掲載されているものであり、日本の若者にとって極めてポピュラーな物語と言つてよい。教科書の中には「愛のかたち」という副題をつけているもの（第一学習社のもの）もある。また、祖父は「学校で漢詩を習つたらう」と言っており、ここには、現代の少年少女が身近にある文学作品をたどりながら、

自然と「死」の哲学にたどりつけるように、読者を導いていく作者の意図が透かし見られる。ただ、登場人物の語りは、祖父にしる、アキにしる、作者の意図を直接語るかのように説教くさいところがあり、わざとらしさの感じは否めないのではあるが。

4. 死生観の進展—死に向かって

第三章は、アキの病状が悪化の一途をたどり、死が二人の生活の中に浸透していく過程が描かれる。それまで「死」は、朔太郎にとって「真つ直ぐに伸びる白い道が、遙か彼方の眩しい光のなかで見えなくなっている。その先にはなにがあるのかわからない。『虚無』だというものもいるが、それを見てきた人間はいない。」というものであり、「自分たちに結び付けて考えることができない」ものであった。しかし、アキに忍び寄る死の陰が濃くなるにしたがつて、二人の意識の中で、祖父の恋の話において開かれた「見えない世界」のかけらは、次第にそれぞれの形をとっていく。

アキはオーストラリアへの修学旅行に行くことができなかったが、その代わりにオーストラリアの先住民「アポリジニの世界観や伝統的な生き方に興味をも」つようになる。朔太郎はそういう彼女の思いを理解し、「かれらの生き方や世界観は、アキが自分の存在をそこに重ね合わせたいと思う理想であり、一つのユートピアだった。」とし、それが彼女の「希望」であり、「苦しい病気のなかで生きる」との意味であることに気づく。修学旅行に参加して実際のアポリジニを見てきた朔太郎は、アキの理念的なアポリジニ理解に当初は疑問をなげつけるのだが、アキの主張に耳を傾けながら「現

実のアボリジニが問題ではない」ことに気づき、アキの認識を理解していく。アキの中では、自らの死を生きるために、理念の世界を構築する必死の試みが行われていたといえる。その試みに伴走する朔太郎も、彼女の理念の世界を共有していく。

二人の間では、生と死について根源的な会話が交わされ、それを通して小説内のテーマは深められていく。その中で、朔太郎は死に近いとはいえ、やはり健康な若者であつて、アキよりも死からは遠い。そのために彼の思索は現実の世界により強く結び付けられており、アキの理念的な言葉に対して、現実的な立場から反論する。朔太郎の思考は「物質的なことばかりに目をむけている」と、アキから非難されている。しかし、その二人の議論のなかでアキの死生観は現実的な足場を持つていく。一方、朔太郎の死生観は、そのアキの思考を通して、その影響を受けながら、物質的な次元を離れて根源的なレベルに降り立っていく。

アキは、アボリジニの世界観について「彼らは地上のすべてのものは、理由があつて存在すると信じている」といい、「宇宙のあらゆるものに目的があつて、突然変異や偶然はありえない」という、意味の偏在する世界を描いてみせる。これについて朔太郎はその「目的」を誤解し、無脳症の嬰児の心臓が心臓障害の子供の臓器移植に利用されるといった実例を持ち出すが、彼女のいう存在の「目的」がそのような物質的な、合理的なレベルで言われているのではないことは言うまでもない。

この問題は、アキにとつては当然自らの直面している「死」の目的というものにつながっていくべきものである。朔太郎はそれを敏

感に察知し、議論を一気に本質的なレベルに引き込む。この場面は小説内のテーマを読み取るうえで最も重要な場面である。

「人の死にも理由があると思う？」 ぼくはたずねた。

「思うわ。」

「ちゃんとした理由や目的があるのなら、どうしてそれを避けようとするんだろう？」

「まだわたしたちが死をうまく理解できていないからよ。」

「いつか天国のはなしをしただろう。アキはあの世や天国を信じないと云つてたじゃない。」

「覚えてる。」

「人の死に意味があるのなら、あの世や天国もあることにしないとは穢褻があわなないんじゃないかな。」

「どうして？」

「だって死んでしまえば、みんなおしまいなわけだろう。そのあとがなければ、死ぬことに意味なんてありえないもの。」

「死」の意味とは何かという、この議論は、宮沢賢治の詩「オホーツク挽歌」において繰り返し広げられる、妹の死後の行方についての自問自答と重なるものである。ここには、人類が「死」について気づいてきた伝統的かつ代表的な発想がある。それは、「死」を、「あの世」「天国」という現実に対立する別世界の側から意味づけるといふ発想である。その別世界に意味の根源を帰属させて、「死」の意味を、すべてあちら側に繰り込んでしまふという発想である。

これに対して、アキはその発想をそっくり逆転させる考え方を述べて、静かに朔太郎のあせりを沈める。

「わたしはね、いまあるもののなかに、みんなあると思うの」
 ようやく口を開くと、彼女は言葉を選ばないように言った。
 「みんなあつて、何も欠けていない。だから足りないものを
 神様にお願ひしたり、あの世とか天国に求める必要はないの。
 だつてみんなあるんだもの。それを見つけない方が大切
 だと思つて」しばらく間を置いて、「いまここにないものは
 死んでもやっぱりないと思うの。いまここにないものだけ
 すが、死んでもやっぱりないと思つて。うまく言え
 ないけど」

つまり、意味はすべてこの世の側にあるという発想である。だから、この世にあるものだけが死後もありつづけるという。だから、アキと朔太郎の関係も死後にもありつづけるのであり、「だから悲しんだり、恐れたりすることはない」とアキは落ち着いて言うのである。こういった思考によつて、「死」へ向かう自己を位置づけていくアキの強さは、やはり「戦闘美少女」の面目を示すものかもしれない。「銀河鉄道の夜」においても、青年教師の教え子「かおる」が「さそりの火」の話をして、生きること、死ぬことの意味をそれとなく語ることを重ねられる。

小説「世界の中心で、愛をさけぶ」の中で、アキの語る二人の世界の意味を最も具体的に象徴的に示そうとしたのが、第二章の無人島における夏の一夜の逢瀬であろう。この無人島での場面は、語りの時間が過去と現在を行ったり来たりする小説内で、アキの臨終の場面の直後にもはさまれることになっている。アキの死後も永遠に存在し続ける二人の愛の世界の中心をなしている。

朔太郎の世界観には、第三章のあの世についての問答の後、変化がきざしていった。朔太郎の中では、夜眠りに就くとき、「心のなかで祈ることが習慣になった」のであつた。それは、「神様のようなか」か、「人智を超えた巨きな存在と取り引き」して彼女が元気をとりもどすようにひたすら「祈り」たかつたからである。そのためには「自分が身代わりになつてもいい」というように、自らを投げ出すほどの願ひに自らをかけている。こういう体験がおそらく人格の成長の上で重要な過程であることはいうまでもなからう。そのときの朔太郎においてはアキに關することが心を占めており、「ちやうど太陽の光が、他の星を隠してしまふように」自分のことは「取るに足りないものに思えた」という。

4、アキの死後—朔太郎の取り組み

第四章は、朔太郎がアキの死後を生きていく苦しみをどう乗り越えるかを描く。愛する人を死によつて失つた祖父の経験との対比が大きな位置を占める。朔太郎は祖父との対話を通してその影響を受けながらも、祖父の言葉にどうしても承服することができず、苦悩の中に沈み込む。

朔太郎の苦しみは、彼の生から「連続的な時間」が失われたことになつた。「何かがつづいていくという感覚、何か伸びやかに育ち、変化していくという感覚が失われて」おり、「未来」は開けなかつたという。その中で、再び「あの世」についての議論が、今度は祖父との間に始まる。しかし、「死」に向かつたアキが深い思索によつて世界観を広げながら苦しみを乗り越えていったのと

は異なり、生き残された朔太郎の心は「彼女がいなという実感」と釣り合わない「理屈」を受け入れることができないのだった。「大人たちの見せる同情や世間知のようなもの」は「誤魔化しや言い訳としか感じられ」ず、「実感が伴わないことは、何一つ受け付けられない」のだった。アキがいたときは「神のような何か」に「祈り」をしていた朔太郎だが、アキを失うと同時に実感を伴った世界観は失われた。祖父の「あの世」についての言葉に「思い込み」だとか、「年寄りの妄想」だとか、単なる自分への「慰め」にすぎないだとか、「理屈」だとか、反発しか感じることができない。

宮沢賢治も、妹の死後、それまで仏教の教えの中で確立された死後についての論や当時話題になっていた科学哲学者の死についての論などを思い浮かべながら、「わたくしはどうしてもさう思はない」（詩「青森挽歌」という感覚に陥り、死後の世界への追求にのめり込んで行く。最愛の人を亡くして、死とはなにかという問題がにわかには現実的なものとなってきたとき、それまで受け入れていた一般論がにわかには信じがたくなるといふ心理には、共通のものがある。朔太郎は祖父に対して「あの世ってあると思う？好きな人とまた一緒にになれるような世界がさ。」と尋ねると同時に、「ぼくはそんなものはないと思うよ」「死んだ人は死につばなしで二度と会えない。それはわかりきったことじゃないか」と「ややむきになって」答えている。ちなみに筆者の大学の卒業論文のテーマは「銀河鉄道の夜」論であったが、作品内の死についてのテーマはついに論することができず、「銀河」についてのイメージ論に終始した。当時、作品内のイメージの美しさだけがリアルであ

り、心をうつものであったからである。そのテーマについて論ずる気になったのは、それから二十年も経ってからのことである。祖父は、朔太郎の感じ方を受け入れ、「考える」ことは「これで充分考えつくされる」ということはなく、不十分な部分はまた考えるということが続けていくうちに、「自分の考えていることに実感が伴ってくる」と論じ、オーストラリアに行くことを勧める。

5、先住民の世界観への融合ーオーストラリアで

小説「世界の中心で愛をさげぶ」は、アキの骨を彼女の遺言に従ってオーストラリアの大地に撒くために、残されたものがオーストラリアに赴く途上から始まる。小説内で、アキが自らの苦しみを乗り越えるために惹かれていったのは、オーストラリア先住民の世界観であった。撒骨の場面では、アボリジニの世界観について、ガイドの男性が解説することになっている。アボリジニは神話を語り継ぐことを「ドリーミング」という。ここでのドリームは、いわゆる「夢」ではなく、「生活する、旅をする」の意味だという。人間が旅をすれば、そこに足跡が残るのと同じように、エネルギーやスピリットが残ると信じられており、アボリジニはそのエネルギーやスピリットを残す行為を「ドリーミング」、そのドリーミングが行われた時間を「ドリームタイム」と呼んでいる。そのドリーミングの中でそれぞれの部族は神話上の祖先を持っており、それがワラビーといった動物になっている。それは一種のトーテムズムである。さらに、ガイドは部族のドリーミングがあると同時に、個人のドリーミングがあると述べている。

その人が生まれたときに、お母さんの見たもの、お母さんが夢で見た動物や植物が、彼と魂を共有する存在となるのです。それらのドリーミングは、けつして公にされることはありません。その人個人の秘密として、信仰の対象にされます。

このように、アポリジニの存在は、生まれつき自然のさまざまな生物とつながったものとしてあると言える。

その世界観に基づいた葬制について解説がなされ、アキが惹かれたアポリジニの死生観に基づいて、彼女の骨はオーストラリアの「赤い」大地に撒かれる。アポリジニにおいては、遺体は二回埋葬されるという。一回目の埋葬では土に埋葬し、二回目は二、三ヶ月経って掘りだした骨を樹皮の上に生前の形のとおり並べて、くりぬいた丸太のなかに収めるのだという。

「やがて骨は雨に洗われ、大地に戻ります。死者の身体に宿った血と汗は、すべて大地にしみ込み、地中の神聖な泉へと向かいます。それを追って、死者の魂も泉へ向かい、そこで精霊となつて暮らすと考えられています。」

アキは、そのようにして自らの体が自然に帰ることを望んだのであり、死に際してアポリジニのドリーミングへの同化を示したのだと言えよう。それは、ある意味で非常に新しい生き方の表明であると言えるのではなからうか。それは、その撒骨を實行する両親や朔太郎の世界からの自立でもあるからである。そこにはアキの強い自己主張が認められ、それがこの小説のひとつの主張ではないかとも思われる。現代の日本には若死にしたアキの心を救う世界観はなかったと言っているようでもある。それとも、それは小説の意匠とし

てのファクション性にしか過ぎないものであろうか。

最近の小説には現代人の心の苦悩を救済するものとして、しばしば様々な先住民の世界観が登場している。吉本ばなな『マリカの永い夜』（一九九四年三月 幻冬舎）におけるバリ島の宗教、村山由佳『翼』（一九九七年九月 集英社）におけるナヴァアホ・インディアンにおける世界観の他、山田詠美『PAY DAY II』（二〇〇三年三月 新潮社）におけるアフリカ系アメリカ人のゴスペルなどである。「世界の中心で、愛をさけぶ」におけるアポリジニの世界観も、その系譜につながるものと言つてよからう。その評価は、ポストコロニアリズムの流行などとの関係も考えられ、単純にはいかないようにも思われるが。

なお、宮沢賢治の場合も、妹トシの死の行方を追い求めて旅をした樺太での体験を描いた詩章「オホーツク挽歌」において、アイヌの世界観との何らかの接触があったことを、拙論においてすでに指摘している（注5）。賢治も、自らの信仰をアイヌの文化を通して更新したと考えられる。大正末期から昭和初期にかけての日本文学史の中でそれを見ると賢治の動向は孤立しているかに見えるが、資本主義社会の世界観を相対化する方向性としての同様の方向性は、歴史の長いサイクルの中で、あるいは周辺の文化の動向には見出すことができるかもしれない。つまり、時代を経てバブル崩壊後の日本の文学においても、前述のように、先住民文化への親近性があったことを指摘できよう。それら時代社会の全体的な動きまで含めて考えると、「世界の中心で、愛をさけぶ」と「銀河鉄道の夜」とのつながりは深いものがあるように思われる。

ただ、「世界の中心で、愛をさけぶ」におけるアポリジニについての描写はきわめて説明的であり、朔太郎自身もそのことよって自らの死生観を変えることはない。朔太郎は撒骨の際、その「白っぽい粉」について「それがなんであるのか、ぼくには理解できなかった。頭では理解できても、感情がその理解を拒んだ。受け入れられると壊れてしまいそうだった」と述べている。小説の中のオーストラリアの自然描写は乾いており、残された朔太郎にとっては決して救いになることはない。

こんもり繁ったユーカリの群生があるほかは、見渡すかぎりの乾いた草原だった。誰も口をきかなかつた。「中略」乾燥した空気のなかで、唇はひび割れかけていた。咽喉も渴いていた。彼の孤独は、時間によってのみ乗り越えられていく。時間が経つにつれて、「目鼻立ちを失った海辺の地蔵のように、アキの思い出もまた風化しつつある」ことを朔太郎は感じようになり、「長い時間を経て、最後には名前だけが残るのだろうか」と懸念するようになる。終章「第五章」では、十年後に朔太郎が恋人を連れて故郷を訪れる場面が描かれる。そこで思い出をたどりなおしながら、その思い出に区切りをつけていく。そこでも「銀河鉄道の夜」のイメージと詩「青森挽歌」の一節とがそれとなくはめ込まれている。

耳のすぐそばで、彼女は喋っていた。懐かしい、あのはにかむような声で。やさしい心はどこへ行ってしまったのだろうか。「中略」夜の雪原を走る列車のように、明るく光る星の下を、いまも走りつづけているのだろうか。どこへとも方向を定めずに。この世界の基準では測れない方位に沿って。

そして、「あるいはいつか、どこへ戻ってくる必要があるのだろうか」と思ったとき、朔太郎は「この世界には、はじまりと終わりがあふ。その両端にアキがいる。それだけで十分な気がした。」と、長年の苦悩から開放される。そして、小瓶に入れて持ち歩いていたアキの遺骨を、高校の校庭に撒く。校庭には「美しい桜吹雪」が舞っている。

ゆつくり瓶の蓋をまわした。そこから先は、もう考えなかつた。「中略」白っぽい灰が、沫雪のように夕暮れの空を舞った。また風が吹いた。桜の花びらが散り、その花びらに紛れて、アキの灰はすぐに見えなくなった。

これが小説の末尾である。ここには、朔太郎が許容できる死のイメージがあるといえるのではなかるうか。それは、やはり「桜吹雪」との同化であつて、アキのイメージする死の世界との大きな違いが印象的である。朔太郎にとっては、オーストラリアの乾いた大地への同化は、どうしてもあるべき死のイメージではなかつたのだといえる。極めて日本的な風景への同化を示して作品は終わっている。

おわりに

小説「世界の中心で、愛をさけぶ」について、主人公たちの教養主義的な死生観の追及の過程を追ってきたのであるが、この小説において引用された文学は、いずれも説明的である。アポリジニの世界観についても同様のことが言える。祖父と恋人の純愛物語も、祖父の言葉を通して説明されるだけである。全体として、

カタログ的な小説と言つてよいのではなからうか。それも現代の若者へのメッセージの形式にのっとつてゐるのかもしれない。この原作を読んだ若者が、登場する文学作品を手取るきつかけになれば、それでこの小説の役目のひとつは果たされるのかもしれない。

注1 大塚英志『「おたく」の精神史 一九八〇年代論』（二〇〇三年七月 朝日文庫）

注2 青春文化の変容について教養主義の衰退を指摘したのは三浦雅士『青春の終焉』（講談社 二〇〇一年九月）が始まりではないか、その後竹内洋『教養主義の没落』（二〇〇三年七月中公新書）が出版されて、一般的に認知されたといえよう。

注3 斎藤環『戦闘美少女の精神分析』（初出、二〇〇四年四月 太田出版。ちくま文庫 二〇〇六年五月）

注4 『中国古典文学大系 第一五巻』（一九六九年二月）

注5 二〇〇六年八月二六日に開催された宮沢賢治学会主催国際研究大会において、「宮沢賢治とアニミズム」と題して発表の中で、賢治の死生観とアイヌ文化受容との関係について指摘した。その発表の内容について、さらに「自己規定『おれはひとりの修羅なのだ』成立までの過程におけるアイヌ文化受容」と題して、『論攷宮沢賢治』第八号（中四国宮沢賢治研究会 二〇〇七年二月発行予定）に発表予定。

なお、宮沢賢治の作品の引用は、『新校本宮沢賢治全集』によつた。また、「世界の中心で、愛をさけぶ」の引用は、『世界の中心

で、愛をさけぶ』（小学館 二〇〇一年四月）によつた。

Kenji Miyazawa and Japanese Modern Literature (III):
View of Life and Death in "Night of the Milky Way Railroad" and "Socrates in Love"
– Variations of Giovanni and Campanella --

Miho AKIEDA (AOKI)

Since 1980s, made into an animation film, "Night of the Milky Way Railroad" has been one of the books of *Kyoyo*(culture) essential for young people. "Socrates in Love", a popular love story appeared in 2001, has been provided with *Kyoyo-Shugi*(-ism) aspects by the quotation from literary works familiar to modern young people in the novel's details. Although main characters, a boy and a girl love each other, the girl's death of disease parts them. The theme of the novel is to describe the process of their confronting the pain of death parting and making their own view of life and death. Discussing what significance reading literary works had in the process, this paper pointed out that a novel "Socrates in Love" has a common conception with the work of Kenji Miyazawa as follows: Giovanni a main character in "Night of the Milky Way Railroad" and the boy overlap, Giovanni witnesses the death of his best friend Campanella, and as the starting point of "Night of the Milky Way Railroad" the author Kenji Miyazawa had a death parting from his beloved sister. In both works, main characters consider such fundamental questions as what death is, whether there is the next world, or whether there is God, and it makes them the works of questioning how the spiritual world should be in the modern developed capitalist society.

[Key words: Literature for Children "Night of the Milky Way Railroad",
View of Life and Death, Native People Culture]